

## インフルエンザの治療についてのお知らせ

### <インフルエンザの症状について>

インフルエンザは、発熱、咳、鼻水、頭痛、のどの痛み、からだの痛み、嘔吐、下痢などが見られますが、多くは数日間から1週間程度の経過で薬を飲まなくとも自然に治癒します。

まれに呼吸器症状（苦しそうな呼吸、ぜんそく発作）、神経症状（異常行動をとる、意識がおかしい、けいれん）などをおこすことがあります。



### <当院での治療について>

当院は、重症（インフルエンザ脳症、インフルエンザによる重症肺炎）インフルエンザ患者さんの受け入れ病院です。

インフルエンザの多くは自然になおるものです。

普段健康で持病のないお子さんには、抗インフルエンザ薬は使用せず、状態に応じて解熱剤投与、経口補液療法などを行った上で、近医（かかりつけ医など）の受診をすすめさせていただきます。

ER受診後、かかりつけ医を受診されるまでは、水分がとれない、おしっこが半日以上出ない、意識状態がおかしい、苦しそうな呼吸をしているなどの症状がないかを観察してください。その疑いがありましたら、再度受診してください。

基礎疾患をもつなどリスクの高い場合、合併症をきたしている場合には、医師の判断でタミフル、リレンザなどの抗インフルエンザ薬を処方いたします。

その際は、情報提供書を近医あてに発行させていただきます。

なお、インフルエンザ迅速検査は、以下の場合を除き、原則実施いたしません。

#### 【検査が必要な場合】

1. ぜんそく、免疫不全、心臓、腎臓、肺、血液などの基礎疾患をもつお子さん
2. 下気道炎や脳症などの合併症が疑われるお子さん
3. 入院が必要なお子さん

### <治療証明書の発行について>

治療証明書（登校・登園許可証明書）の発行については、最後に受診した医療機関にご相談ください。

### <インフルエンザワクチンの予防接種について>

インフルエンザは予防接種である程度、予防できます。お近くのかかりつけ医にご相談ください。

（当院では、特別な場合をのぞき、インフルエンザワクチンの予防接種は実施しておりません。）

平成24年10月

東京都立小児総合医療センター

## 【解熱剤の使い方】

解熱剤は、熱によるつらさを軽くするための薬で、病気を治す薬ではありません。高熱でも、元気そうであれば、使わなくても構いません。眠っている子を起こしてまで、使用する必要はありません。解熱剤を使うことで、熱が少しでも下がって元気になっている時に、水分をとったり、睡眠がとれることがあります。

また、解熱剤の効果は一時的なものです。体温をあげる力が解熱剤の力よりも強ければ、ほとんど解熱効果が得られない場合もあります。

1回使用したら次に使用するまで6～8時間は時間をあけてください。



Q 解熱剤はどれでもいい？

大人に使用しているものでも、子どもには適さない解熱剤もあります。

子どもで使用している解熱剤は、アセトアミノフェンになります。



Q 坐薬？それとも飲み薬？

効き目は同じです。

吐いている子には坐薬を、下痢の時や坐薬が嫌いな子には飲み薬を使ってください。

坐薬の解熱剤と飲み薬の解熱剤を同時に使わないように注意をしてください。



また、熱があるときには、保冷材等を使って、脇の下・首の横・足の付け根を冷やしてあげてください。

## 【経口補液（水分摂取）に関して】

熱が出たときの水分補給は、経口補水液がいいでしょう。

水やお茶などの水分だけで食事がとれない状態では糖分が足りなくなってしまうたり、体の中のミネラルのバランスが崩れてしまうことがあります。

市販のものでも小児用のものがでています（例：OS-1、アクアライトORS など）

母乳やミルクを飲まれているお子さんでは、母乳やミルクを継続してもらって構いません。

何より“こまめ”に水分をとることが大切です。特に吐いてしまうようなお子さんでは、最初は一口あるいはスプーン等で5 mL程度を数分間隔から開始してください。吐かずに飲めたら、量を少しずつ多くしていきましょう。

食物は水分がしっかり摂れるまで無理しないようにしましょう。

